OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『金沢の近代工芸史研究』本編A4判184P,別冊補遺 金沢漆器の動向　A4判57P 金沢美術工芸大学美術工芸研究所発行1995限定500部
Author(s)	佐藤, 敬二
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 112-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52986
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『金沢の近代工芸史研究』

本編　A 4判　184 P，別冊補遺 — 金沢漆器の動向 —A 4判　57 P
金沢美術工芸大学美術工芸研究所発行　1995　限定500部

佐藤敬二／京都市工業試験場

近代日本の工芸史を概観するとき，作家による美術工芸は東京中心に展開されてきた感も有るが，産業工芸の歴史は地方の地場産業振興の歴史であったと言っても過言ではない。

それらは明治維新による多くの工芸職人の疲弊や職種断絶からいかに生業を守るかという所より出発し，勧業施策として輸出振興のための博覧会への参加や，展覧会の開催，工芸振興のための高等教育機関，工業試験場や勧業館などの設立，業界団体の育成など国や地方行政の施策の歴史だといえる。

特に東京遷都による大打撃の後，西陣織，友禅染，清水焼，漆器，金工，木竹工ほか多くの伝統的産業を近代化させるべく，美術工芸学校や高等工芸学校，陶磁器試験場など工芸教育機関の設立や博覧会開催により業界振興を図っていた京都をはじめ，地場産業を持つ日本各地で産業の振興がはかられた。特に加賀藩の政策により文化的にも栄えていた金沢は，明治維新後の武家社会の崩壊による工芸業界への打撃の大きさや，その業界振興に対する取組みに於いて京都と類似点が多かったと言えよう。

金沢美術工芸大学美術工芸研究所所長　小松曉一氏の序文によれば，「金沢の近代工芸史研究」は今もなお豊富な工芸分野と人材を擁して美的質的に極めて高い地位を誇っている金沢の工芸について，近代以降の展開の諸相を再認しようとする研究を通して纏められた。またこの研究は当初，近代初頭の明治維新から昭和20年までを対象期間としていたが，情報量の膨大さと明治・昭和の状況的差異が大きいことなどの理由で，明治大正期と昭和期を二分して報告を行う事になった。本書では明治大正期を範囲として扱われている。

各章の内容を順次見て行きたい。

第1章「近代工芸の黎明」は，本学会会員であり日本工芸史を専門とする美術工芸研究所の山崎達文氏の筆である。

1　**明治維新と工芸**　では明治維新を迎え藩の御用で身を立てていた工芸職人の困窮の様子を，鞘師池田次衛門ら刀剣拵の諸職十人の拝借銀の免除願の書状により考察。次に明治維新直前の加賀藩による先行的勧業施策といえる，各種手工場や産物集会所，舎密局・薬圃・養生所から神社や演芸場にいたるまで作った卯辰山開拓について『卯辰山開拓録』から解説し，また卯辰山北西麓の諸窯や陶器所，卯辰山に関わりの深い陶工たちを紹介している。

2　**殖産工業と初期先覚者**　では九谷色絵の優品を内外に送り出し，金沢九谷の名声を高らしめた阿部碧海を取上げている。明治六年のウイーン万博をはじめ十年の京都博覧会や第一回内国勧業博覧会に多数出品，欧米の需要を探るなど，『石川県史』や阿部碧海の子孫より大学に託された資料に基づき，殖産興業の先覚者として位置づけている。

3　**銅器会社**　では明治十年第一回内国勧業博覧会出品を機に，長谷川準也が始めた銅器会社の活動と終焉について『金沢銅器製造元記』や『内国勧業博覧会審査評』などから豊富な具体例を挙げている。

4　**勧業博物館**　においては京都博覧会が明治4年から18年まで毎年14回も開催された

が，その成功に刺激され金沢で５年と７年に博覧会を開く経過を，また博覧会から常設博物館の設置，勧業博物館の成立と，本来の図案提供の役割をした図書室の設置まで『石川県勧業博物館創立十年略記・二十年略記』などの資料により考察している。また図案の研鑽と工芸品の意匠向上を図り，需要拡張を意図して東京の龍池会に倣って結成された蓮池会（勧業博物館に隣接する兼六園の蓮池に因んで名付けた）の活動を紹介している。

５　金沢区工業学校の創設と納富介次郎　石川県が明治13年勧業特産教師として，のち図案で帝室技芸員となり神阪雪佳の師にもなる岸光景を招聘する。帰京するに当たり岸は納富介次郎を紹介し，納富は15年に農商務省の嘱託を受け，石川県下に美術工業改良のため勧業巡回教師として招聘された。その後20年に金沢区工業学校を創設するが，金沢との関わりの中での納富の動向と工業学校の創設に至る経緯が『石川県勧業第五回・第七回年報』『金沢叢語』や県立工芸高校『七十年史』の資料を基に良く纏められている。

第２章「近代工芸の振興」は，日本工芸史を専門とする㈶成巽閣の東澄子氏，本学会会員であり千葉大学大学院で意匠論・意匠史専攻の比嘉明子氏，金属工芸を専門とする美術工芸研究所の中川衛氏，本学会会員であり，染色工芸を専門とする金沢美術工芸大学の川本敦久氏の各氏が執筆している。

１　石川県物産陳列館と出品人共励会，２　石川県商品陳列所，３　石川県工芸奨励会の３項は東澄子氏の担当である。ここでは博覧会社の設立から明治９年金沢博物館の設立にいたる経過，勧業博物館から物産陳列館の活動について調査し，特に明治45年に開始され，外国文の作成と翻訳，試売や輸入，内外国の販路や需要の調査などを行った調査部と大正２年設置で図案調製事務を行った図案部の活動について述べている。また陳列館で開かれた展覧会や講演会，特に「図案展覧会」「重要物産展覧会」「新商品展覧会」「内外品比較展覧会」「美術工藝品展覧会」「図案及び応用作品展覧会」について触れている。

大正９年には石川県工業試験場の設立に伴い，試験部と図案部が工業試験場の所管となり，物産陳列館は調査課と図案課を持ち一層図案調整と指導に貢献することとなった。名称も商品陳列所と改称されるが，雑誌『共勵』や『石川県五業美術工芸』の発刊など出品共励会の活動や物産陳列館規則，出品人共励会規約，商品陳列所規則など『石川県商品陳列所年報』に基づく資料紹介も含め解説している。

大正10年名工の養成と，世に隠れた名工を見出すべく，東京美術学校図案科教授の島田佳矣の唱導により作られた石川県工芸奨励会については，その構成と活動について大正15年の『北陸毎日新聞』資料により詳しく述べている。

４　石川県工業試験場　(1)地方試験研究機関成立の歴史的過程　の項は比嘉明子氏の担当である。農商務省の『興業意見』の提言を受けて政府は明治29年農商工高等会議を創設，その会議の決定で国立試験研究機関や地方試験研究機関が成立することになるが，その歴史的過程が全国の産業奨励の動きの中で捕えられている。

(2)石川県工業試験場の設立運動(3)石川県工業試験場の開場(4)業務内容の様相は中川衛氏の担当で，大正10年に開場した工業試験場の業務内容とその業界ニーズのなかでの紆余曲折について，明治40年の『北陸新聞』や大正９～14年の『北陸毎日新聞』記事，大正６～７年の『石川県通常県会議案書・議事録』の資料などで詳しく考察している。

5　**金沢の染色業と加賀友禅**　は川本敦久氏の担当で(1)染物業組合では明治34年頃の設立とその後や「染業組合長代員選挙会」「染物業者軋轢融和策」「犀川染業徒弟奨励会」「金沢市染物同業組合」について明治35年の『政教新聞』の記事を中心に紹介。

(2)友禅染め復興への道　では大正２年の第１回応用図案展覧会や５年の美術工芸品展覧会など各種工芸展への出品，大正２年設立の図案研究会などについて触れており，その他友禅復興の機運と徒弟育成，友禅祭と墓石保存会の設立，加賀友禅研究と人材育成について大正６～11年の『北陸毎日新聞』記事を紹介。

(3)友禅普及のための展覧会　では「友禅資料陳列会」「染物陳列会と友禅図案懸賞募集」「加賀友禅復興の機運」「京都記念博覧会における染色の感想」などについて大正11年～13年の『北陸毎日新聞』により紹介。

(4)新しい振興策　では「美術工芸伝修生の派遣」「意匠図案及び作品展覧会の募集」「巡回陳列会の開催」「商陳の染物展」「意匠図案及び作品展覧会受賞者決定する」「友禅染普及のための巡回陳列会を」「県商工課に図案部を新設」「商工省工芸美術品展覧会」「標準色の見本審査」「染物組合の新事業」「商工省展覧会における本県の評価」「製作品品評会」「加賀友禅に新図案を注入」という見出しの大正13年から15年の『北陸毎日新聞』の記事を紹介している。

6　**「農展」の開催と金沢の工芸界**　は比嘉明子氏の筆である。大正２年に始まり昭和14年にその使命を終える「農商務省図案及び応用作品展」は文展に対して「農展」と呼ばれ，工芸を扱う官展としては大正期唯一の展覧会であり，当時の工芸・デザインや産業振興に多大な影響を及ぼした。当時わが国に紹介されたアールヌーボーやセセッション，武田五一命名のマルホフ式など欧州のデザインの影響や藤原模様・天平模様などの日本古典復古調デザインなどが見られるユニークな展覧会であった。

その経過や特徴，金沢工芸界に果たした役割など(1)農展について(2)農展開催の背景(3)金沢の農展への出品者(4)金沢における工芸振興と農展出品について　の各項で詳しく述べられている。

「別冊補遺 ― 金沢漆器の動向 ―」は近代初頭から大正期までの金沢工芸の展開について論じた本編につづいて，各論として「漆器」を取上げ，その動向を論考した金沢美術工芸大学の柳橋眞氏による研究報告となっている。

今日でも多くの工人作家が漆器づくりに活躍し，加賀蒔絵の伝統を継承している金沢漆器の動向について８項目に分けて述べられ，最後に金沢工芸史年表が付属している。

1　**明治期の名匠**　では明治38年『金沢工業沿革誌料』大正18年『加賀能登故工芸作家名鑑』昭和11年『郷土漆器の文献と展覧会』より明治・大正・昭和の名匠をリストアップし，蒔絵の澤田宗澤と塗りの鶴田和三郎の評価が群を抜いているという。

2　**海外博覧会に見る金沢漆器**　では当時の『政教新聞』『北陸新聞』から37年セントルイス万博，38年ベルギー万博，43年日英博覧会，43年チリー万博，44年イタリー万博，大正２年ベルギー万博，３年南洋万博，４年サンフランシスコ万博，14年パリ万博の受賞者や県から派遣された委員の談話などを載せている。

3　**共進会にみる金沢漆器**　では明治18年『繭絲織物陶漆器共進会審査報告』（審査官兼報告員納富介次郎）を引用，石川の出品数

は全国でトップ，1位の無い中，京都の木村表斎（2位）に次いで沢田次作が3位を受賞している事より技術の優秀性をあげている。

4　**漆器産業の問題点**　では明治34年の『政教新聞』の記事より高い賃金から漆が高価なものになり漆器離れや国産漆離れが起こっている問題を取り上げている。

5　**大正期の漆器産業**　では大正5年『北陸新聞』で連載された大正4年全国の漆器産業の中で石川の漆器の産額はトップであるが意匠が古い。輸出は静岡が一番で意匠に努力していることを取り上げている。

6　**石川県物産陳列館にみる金沢漆器**　明治44年石川県物産陳列館報の附録『石川県重要物産同業組合之現状』で金沢漆器同業組合を輪島塗りや山中塗りと比較，物産陳列館への漆器出品者と産地別依託販賣高比較表を載せ，出品者を考察している。

7　**漆液について**　大正12年の『商品陳列館報』掲載の東京美術学校講師辻村松華が漆液や研炭，漆刷毛や蒔絵筆など漆器制作材料の重要性を講演した内容を紹介している。

8　**農商務省工芸展**にみる金沢漆器　では輸出を意識した斬新な意匠の漆器が山中や輪島からの出品に多い中，金沢漆器は古風で国内向けの高級な美術漆器の性格が強かったと述べ，出品写真と出品一覧を載せている。

明治から大正期の近代工芸は海外デザインの影響を大きく受けながら，日本古来の意匠感覚を見直す時期でもある。大正15年日本工芸美術会の結成の後，昭和2年第8回帝国美術院展（帝展）第4科として初めて工芸の参加が認められ，芸術的創作を目指す工芸家達の悲願が達成される事になる。明治末から昭和前期の時期，京都では神阪雪佳や浅井忠達を指導者に多くの工芸研究団体が活発に活動し，作家が育つ萌芽と業界振興の基盤が醸成されていた。金沢に於いても同様の状況であったと思われる。

願わくば工芸品の造形・意匠の傾向について，伝統意匠の近代化と海外デザインの影響など作風の特徴についての考察があれば，と思うのは贅沢過ぎる希望かも知れない。

本編，別冊を通じ各ページの報告文の周りに枠取りがなされ，本文の著者の一人であり，編集の要でもある山崎氏の手によって，五十嵐他次郎（隋甫）明治18年作の竹林図蒔絵小蓋盆の竹意匠がアレンジされており，ともすれば固くなりがちなこの種の報告集に変化と和みを与え，ユニークなエディトリアルデザインとなっている。

ともあれ近代の工芸・美術に関心が高まっている今日，本書の発刊は誠にタイムリーな企画であり，残存する工芸品資料が少なく，また文献資料の散逸が危ぶまれる中，著者と編集者の努力に敬服すると同時に昭和編の発行が待たれる所である。

残念ながらこの図書はその性格から，限定500部の発行で，一般の書店で人の目に触れる機会はないが，近代工芸に関心を持つ人や研究者には是非目を通してほしい図書である。